

Ⅱ 調査結果の概要

発 育 状 態

Ⅰ 身長・体重の平均値

令和6年度及び令和5年度の幼稚園、小学校、中学校、高等学校における幼児、児童及び生徒の身長・体重の平均値を年齢別にみると、表1のとおりである。

表1 年齢別、身長・体重の平均値

		身長 (cm)				体重 (kg)			
		男		女		男		女	
		R6	R5	R6	R5	R6	R5	R6	R5
幼稚園	5歳	110.6	110.3	109.7	109.8	19.2	19.0	19.0	18.8
小学校	6歳	116.5	116.8	115.8	115.6	21.3	21.7	20.8	21.2
	7歳	122.4	122.9	121.7	121.8	24.4	24.6	24.0	24.0
	8歳	128.5	128.3	127.9	127.8	27.7	27.6	27.2	27.2
	9歳	133.6	133.4	133.5	134.7	31.0	31.0	30.3	31.4
	10歳	139.4	139.3	140.0	141.5	35.0	35.2	34.6	35.5
中学校	11歳	145.9	145.7	147.0	147.8	39.0	39.4	39.6	40.1
	12歳	153.1	153.2	152.2	152.0	44.5	45.3	45.4	45.2
	13歳	160.3	160.7	154.8	154.7	49.8	50.5	47.9	48.4
高等学校	14歳	165.8	165.6	155.9	155.9	55.6	54.8	50.4	50.4
	15歳	169.5	168.3	156.9	157.4	60.1	58.7	51.7	52.3
	16歳	169.8	170.1	156.9	157.0	61.5	61.7	52.1	53.0
	17歳	170.5	170.9	157.4	157.3	63.4	63.9	53.2	53.3

※令和2年度から令和5年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、他の年度と測定時期が異なっているため、過去の数値と単純比較することはできない。

(1) 身長

男子の身長は、5歳で110.6cm、11歳で145.9cm、14歳で165.8cm、17歳で170.5cmとなっており、5歳、8歳～11歳、14歳、15歳の各年齢で前年度より伸びている。

なお、各年齢間の身長差は11歳と12歳、12歳と13歳の間（7.2cm）が最も大きく、15歳と16歳の間（0.3cm）が最も小さい。

女子の身長は、5歳で109.7cm、11歳で147.0cm、14歳で155.9cm、17歳で157.4cmとなっており、6歳、8歳、12歳、13歳、17歳の各年齢で前年度より伸びている。

なお、各年齢間の身長差は10歳と11歳の間（7.0cm）が最も大きく、15歳と16歳の間（0.0cm）が最も小さい。

10歳、11歳で女子の身長は、男子の身長を上回っている。

(2) 体重

男子の体重は、5歳で19.2kg、11歳で39.0kg、14歳で55.6kg、17歳で63.4kgとなっており、5歳、8歳、14歳、15歳の各年齢で前年度より増えている。

なお、各年齢間の体重差は13歳と14歳の間（5.8kg）が最も大きく、15歳と16歳の間（1.4kg）が最も小さい。

女子の体重は、5歳で19.0kg、11歳で39.6kg、14歳で50.4kg、17歳で53.2kgとなっており、5歳、12歳の各年齢で前年度より増えている。

なお、各年齢間の体重差は11歳と12歳の間（5.8kg）が最も大きく、15歳と16歳の間（0.4kg）が最も小さい。

11歳、12歳で女子の体重は、男子の体重を上回っている。

※令和2年度から令和5年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、他の年度と測定時期が異なっているため、過去の数値と単純比較することはできない。

2 身長・体重の推移

(1) 身長の推移

① 身長の推移をみると、表2のとおり、男女ともここ数年ほぼ横ばい傾向を示している。

② 親の世代である約30年前(平成6年度)と比較すると、表2の年齢区分では、男子の身長は、6歳で0.1cm、11歳で1.4cm、14歳で1.9cm、17歳で0.7cm高くなっている。

女子の身長は、11歳で0.4cm、17歳で0.1cm高く、14歳で0.4cm、低くなっている。

③ 表2の年齢区分で全国と比較すると、令和6年度では、男子の身長は、6歳で0.2cm、11歳で0.1cm、14歳で0.3cm、17歳で0.3cm低くなっている。

女子の身長は、11歳で0.8cm、14歳で0.5cm、17歳で0.6cm低くなっている。

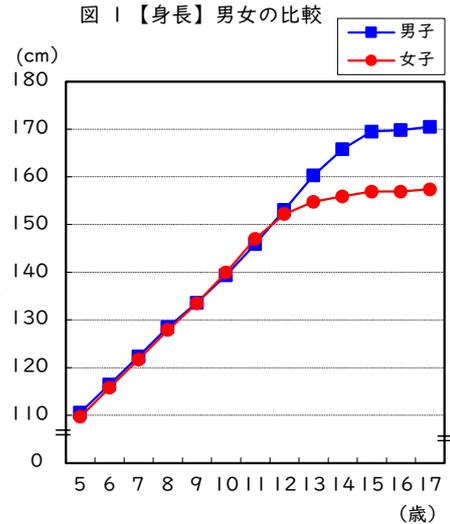
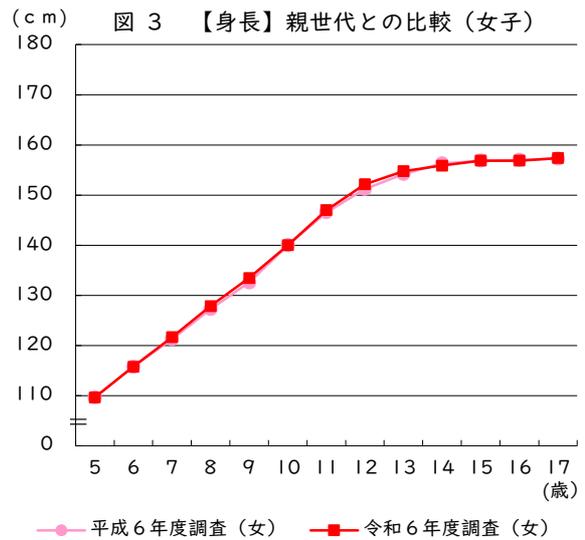
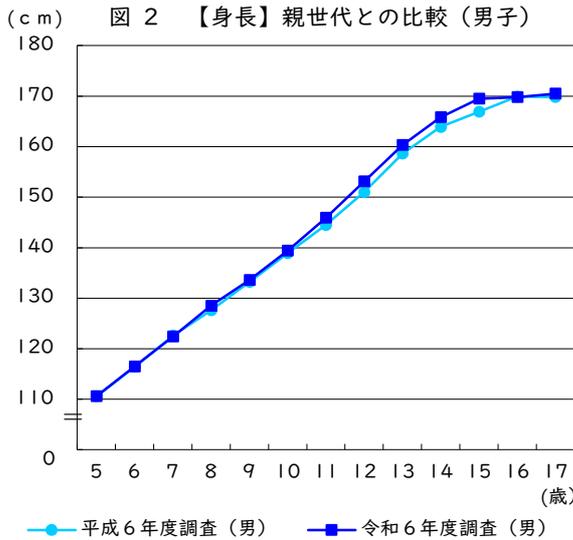


表2 身長の推移

(単位: cm)

区分	佐賀県							
	男				女			
	6歳	11歳	14歳	17歳	6歳	11歳	14歳	17歳
平成6年度	116.4	144.5	163.9	169.8	115.8	146.6	156.3	157.3
平成16	116.7	144.9	164.8	170.1	115.8	146.4	156.4	157.3
26	116.5	144.9	164.8	170.1	115.6	146.5	156.1	157.5
令和元	116.4	145.2	164.9	170.2	115.9	146.6	155.8	157.1
2	116.6	145.2	165.1	169.5	116.1	147.3	155.8	156.5
3	116.5	144.9	165.4	170.8	115.5	147.0	155.9	157.4
4	116.9	145.3	165.1	170.1	115.8	147.2	156.1	157.3
5	116.8	145.7	165.6	170.9	115.6	147.8	155.9	157.3
6	116.5	145.9	165.8	170.5	115.8	147.0	155.9	157.4
区分	全国							
	男				女			
	6歳	11歳	14歳	17歳	6歳	11歳	14歳	17歳
平成6年度	116.8	144.9	165.1	170.9	116.1	146.7	156.6	158.1
平成16	116.8	145.1	165.3	170.8	115.8	146.9	156.7	157.9
26	116.5	145.1	165.1	170.7	115.5	146.8	156.4	157.9
令和元	116.5	145.2	165.4	170.6	115.6	146.6	156.5	157.9
2	117.5	146.6	166.1	170.7	116.7	148.0	156.7	157.9
3	116.7	145.9	165.7	170.8	115.8	147.3	156.5	158.0
4	117.0	146.1	165.8	170.7	116.0	147.9	156.5	158.0
5	116.9	146.2	166.0	170.7	116.0	147.9	156.4	158.0
6	116.7	146.0	166.1	170.8	115.8	147.8	156.4	158.0

※令和2年度から令和5年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、他の年度と測定時期が異なっているため、過去の数値と単純比較することはできない。



④ 年間発育量

平成18年度生まれ（令和6年度17歳）の年間発育量をみると、表3のとおり男子では12歳時、女子では10歳時に最大の発育量を示しており、最大発育量を示す年齢は、女子の方が男子に比べ2歳早くなっている。

また、この発育量を親の世代（平成6年度17歳）と比較すると、男子では発育量が最大となる時期は、親の世代より1歳遅く、5歳、8歳、10歳、12歳、15歳の各歳時で親の世代を上回っている。

女子については、発育量が最大となる時期は親の世代より1歳遅く、6歳、7歳、8歳、10歳、14歳、16歳の各歳時で、親の世代を上回っている。

表3 【身長】平成18年度生まれと昭和51年度生まれの者の年間発育量の比較

(単位: cm)

区分	男子		女子		
	平成18年度生まれ (令和6年度17歳)	昭和51年度生まれ (親の世代の17歳)	平成18年度生まれ (令和6年度17歳)	昭和51年度生まれ (親の世代の17歳)	
総発育量	60.1	—	47.7	—	
幼稚園	5歳時	6.3	5.8	5.4	5.9
小学校	6歳時	5.6	5.9	6.0	5.9
	7	5.3	5.7	5.9	5.8
	8	5.7	5.2	5.9	5.6
	9	5.4	5.4	6.6	6.7
	10	6.2	5.2	6.9	5.9
中学校	11	7.3	7.6	5.1	6.1
	12歳時	7.5	7.4	2.9	3.1
	13	5.7	6.3	1.5	1.9
高等学校	14	3.0	3.6	0.7	0.6
	15歳時	1.7	1.6	0.4	1.1
	16	0.4	0.5	0.4	-0.6

注) 年間発育量とは、例えば、平成18年度生まれの5歳時の年間発育量は、平成25年度調査6歳の者の身長から平成24年度調査5歳の者の身長を引いたものである。

図4 【身長】平成18年度生まれと昭和51年度生まれの者の年間発育量の比較（男子）

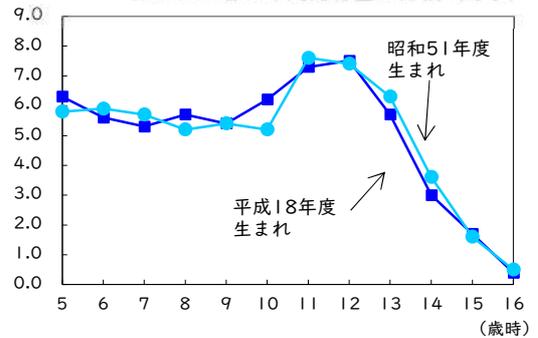
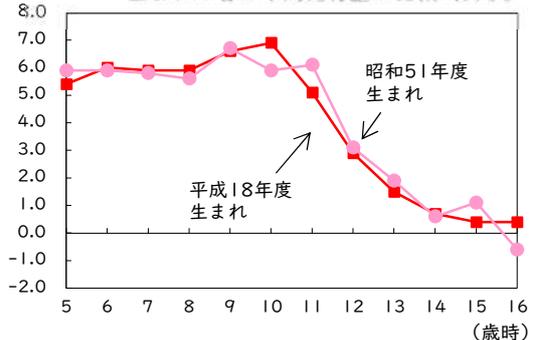
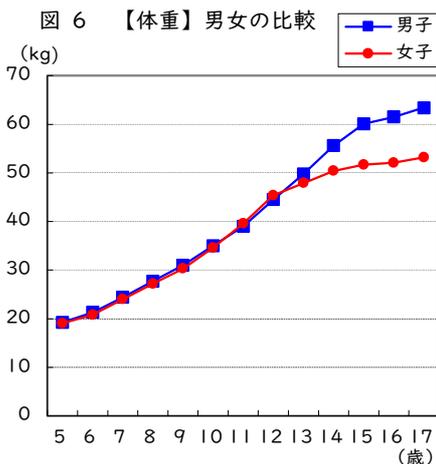


図5 【身長】平成18年度生まれと昭和51年度生まれの者の年間発育量の比較（女子）



(2) 体重の推移

- ① 体重の推移をみると、表4のとおり、男女ともここ数年ほぼ横ばい傾向を示している。
- ② 親の世代である、約30年前（平成6年度）と比較すると、表4の年齢区分では、男子の体重は、6歳で同値、11歳で1.0kg、14歳で2.2kg、17歳で1.9kg重くなっている。
女子の体重は、6歳で0.1kg軽く、11歳で0.6kg、14歳で0.3kg重く、17歳で0.2kg軽くなっている。



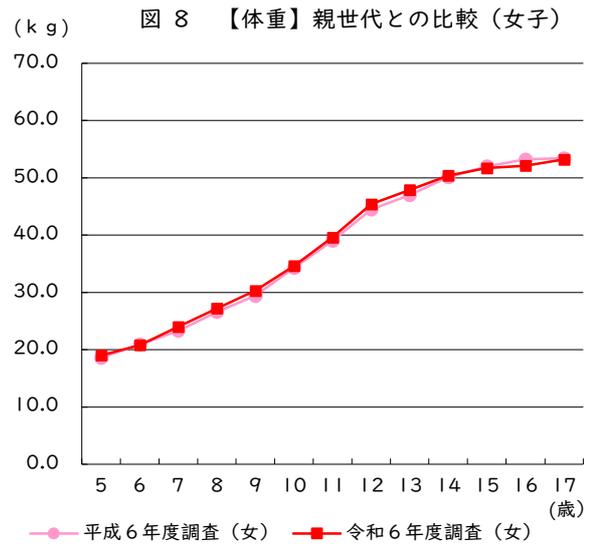
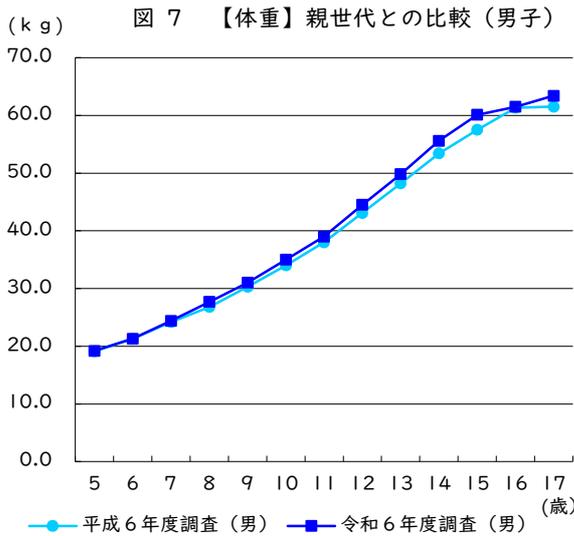
- ③ 表4の年齢区分で全国と比較すると、令和6年度では、男子の体重は、6歳で0.1kg、11歳で0.6kg軽く、14歳で0.6kg、17歳で1.2kg重くなっている。
女子の体重は、6歳で0.2kg、11歳で0.5kg軽く、14歳で0.8kg、17歳で0.7kg重くなっている

表4 体重の推移

(単位：kg)

区分	佐賀県							
	男				女			
	6歳	11歳	14歳	17歳	6歳	11歳	14歳	17歳
平成6年度	21.3	38.0	53.4	61.5	20.9	39.0	50.1	53.4
平成16	21.5	38.8	54.6	62.3	21.0	39.0	50.6	53.7
26	21.5	38.6	53.9	62.5	21.0	39.2	50.8	52.5
令和元	21.4	39.5	53.7	62.8	21.4	39.9	50.0	52.9
2	21.7	38.7	54.9	62.2	21.4	40.0	50.6	52.8
3	21.6	38.6	54.4	62.2	21.2	39.9	50.2	52.9
4	21.8	39.2	54.6	62.9	21.3	40.4	50.5	52.8
5	21.7	39.4	54.8	63.9	21.2	40.1	50.4	53.3
6	21.3	39.0	55.6	63.4	20.8	39.6	50.4	53.2
区分	全国							
	男				女			
	6歳	11歳	14歳	17歳	6歳	11歳	14歳	17歳
平成6年度	21.6	38.4	54.6	62.9	21.2	39.4	50.5	53.1
平成16	21.6	39.0	55.2	63.5	21.1	39.6	50.7	53.5
26	21.3	38.4	53.9	62.6	20.8	39.0	50.0	52.9
令和元	21.4	38.7	54.1	62.5	20.9	39.0	50.1	53.0
2	22.0	40.4	55.2	62.6	21.5	40.3	50.2	52.3
3	21.7	39.6	54.7	62.4	21.2	39.8	50.0	52.5
4	21.8	40.0	55.0	62.5	21.3	40.5	49.9	52.5
5	21.6	39.9	54.9	62.0	21.2	40.2	49.8	52.6
6	21.4	39.6	55.0	62.2	21.0	40.1	49.6	52.5

※令和2年度から令和5年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、他の年度と測定時期が異なっているため、過去の数値と単純比較することはできない。



④ 年間発育量

平成18年度生まれ（令和6年度17歳）の年間発育量をみると、表5のとおり、男子・女子ともに11歳時に最大の発育量を示している。

また、この発育量を親の世代（平成6年度17歳）と比較すると、男子では発育量が最大となる時期は、親の世代と同時期で、5歳、8歳、10歳、11歳、14歳、16歳の各歳時で親の世代を上回っている。

女子については、発育量が最大となる時期は親の世代と同時期で、6歳、8歳、10歳、11歳、16歳の各歳時で親の世代を上回っている。

表5 【体重】平成18年度生まれと昭和51年度生まれの者の年間発育量の比較

(単位: kg)

区分	男子		女子	
	平成18年度生まれ (令和6年度17歳)	昭和51年度生まれ (親の世代の17歳)	平成18年度生まれ (令和6年度17歳)	昭和51年度生まれ (親の世代の17歳)
総発育量	44.4	—	34.6	—
幼稚園				
5歳時	2.6	1.8	2.2	2.2
小学校				
6歳時	2.4	2.6	2.6	2.2
7	2.7	2.8	2.8	2.9
8	4.0	2.8	3.6	3.2
9	3.5	4.0	4.0	4.5
10	4.1	3.1	5.0	3.9
11	6.7	5.7	5.8	5.6
中学校				
12歳時	4.4	5.7	3.5	3.8
13	5.0	5.7	2.1	3.1
14	5.7	5.4	1.7	2.5
高等学校				
15歳時	1.6	2.0	1.1	1.3
16	1.7	1.2	0.2	-0.2

注) 年間発育量とは、例えば、平成18年度生まれの5歳時の年間発育量は、平成25年度調査6歳の者の身長から平成24年度調査5歳の者の体重を引いたものである。

図9 【体重】平成18年度生まれと昭和51年度生まれの者の年間発育量の比較（男子）

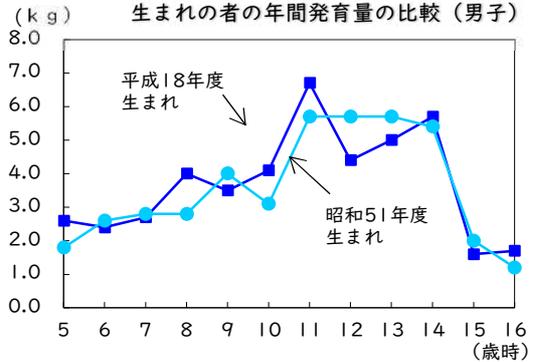
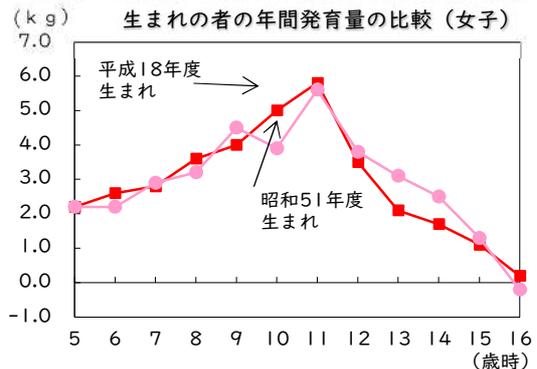


図10 【体重】平成18年度生まれと昭和51年度生まれの者の年間発育量の比較（女子）



健康状態

1 疾病・異常の被患率状況

疾病・異常の被患率を段階別にみると、表6のとおりである。

疾病・異常の被患率の中で高いものは、裸眼視力1.0未満で、中学校65.0%、小学校36.9%、むし歯(う歯)は、小学校43.1%、高等学校34.6%、幼稚園28.2%、中学校23.9%の順となっている。

表6 疾病・異常の被患率

(単位：%)

区分	幼稚園	小学校	中学校	高等学校					
90%以上									
80%以上～90%未満									
70%以上～80%未満									
60%以上～70%未満			裸眼視力1.0未満	65.0					
50%以上～60%未満									
40%以上～50%未満		むし歯(う歯)	43.1						
30%以上～40%未満		裸眼視力1.0未満	36.9	むし歯(う歯)	34.6				
20%以上～30%未満	むし歯(う歯)	28.2		むし歯(う歯)	23.9				
10%以上～20%未満	裸眼視力1.0未満	14.2	歯・口腔のその他の疾病・異常 鼻・副鼻腔疾患 その他の疾病・異常	12.2 13.7 8.7	鼻・副鼻腔疾患 8.2				
1%以上 ～ 10%未満	8%以上～10%未満								
	6%以上～8%未満	歯列・咬合	6.8	耳疾患	6.5	その他の疾病・異常	6.0	鼻・副鼻腔疾患	6.5
	4%以上 ～ 6%未満	耳疾患 鼻・副鼻腔疾患	5.5 4.0	歯列・咬合 心電図異常	4.4 4.2	歯肉の状態 歯垢の状態 耳疾患 歯・口腔のその他の疾病・異常	4.7 4.6 4.5 4.5	心電図異常 歯列・咬合 歯肉の状態 その他の疾病・異常	4.5 4.3 4.3 4.1
	2%以上 ～ 4%未満	その他の疾病・異常 歯・口腔のその他の疾病・異常 その他の皮膚疾患	2.8 2.6 2.0	歯垢の状態 眼の疾病・異常 ぜん息 栄養状態	3.5 3.4 2.7 2.4	歯列・咬合 心電図異常 眼の疾病・異常	3.9 3.7 2.1	眼の疾病・異常 歯垢の状態 耳疾患 栄養状態	2.8 2.4 2.1 2.0
	1%以上 ～ 2%未満	口腔咽喉頭疾患・異常 アトピー性皮膚炎	1.9 1.7	歯肉の状態 アトピー性皮膚炎 せき柱の状態	1.8 1.7 1.2	せき柱の状態 蛋白検出の者 アトピー性皮膚炎 ぜん息 栄養状態	1.7 1.6 1.5 1.5 1.2	歯・口腔のその他の疾病・異常 アトピー性皮膚炎 蛋白検出の者 ぜん息 せき柱の状態	1.8 1.6 1.4 1.3 1.0
0.1%以上 ～ 1%未満	0.5%以上 ～ 1%未満	蛋白検出の者 ぜん息 心臓の疾病・異常	0.6 0.6 0.4	心臓の疾病・異常 口腔咽喉頭疾患・異常 難聴	0.9 0.8 0.6	四肢の状態 心臓の疾病・異常	0.9 0.8	顎関節 心臓の疾病・異常	0.6 0.6
	0.1%以上 ～ 0.5%未満	歯肉の状態 胸郭の状態 顎関節 歯垢の状態 栄養状態 せき柱の状態 言語障害	0.3 0.2 0.1 0.1 0.1 0.1 0.1	四肢の状態 その他の皮膚疾患 蛋白検出の者 言語障害 顎関節 胸郭の状態 尿糖検出の者 腎臓疾患	0.4 0.4 0.3 0.2 0.1 0.1 0.1	難聴 口腔咽喉頭疾患・異常 その他の皮膚疾患 腎臓疾患 顎関節 胸郭の状態 尿糖検出の者 言語障害	0.3 0.2 0.2 0.2 0.2 0.1 0.1	難聴 胸郭の状態 四肢の状態 尿糖検出の者 口腔咽喉頭疾患・異常 その他の皮膚疾患 腎臓疾患 言語障害	0.3 0.3 0.2 0.2 0.1 0.1 0.1
0.1%未満			結核の精密検査対象者	0.0	結核の精密検査対象者	0.0			

注) 1 「口腔咽喉頭疾患・異常」とは、口腔の疾患・異常、アデノイド、へんとう肥大、咽喉炎、喉頭炎、へんとう炎、音声言語異常等のある者をいう。
 2 「歯・口腔のその他の疾病・異常」とは、口角炎、口唇炎、口内炎、唇裂、口蓋裂、舌小帯異常、唾石等のある者をいう。
 3 「心電図異常」とは、心電図検査の結果、異常と判定された者である。
 4 「その他の皮膚疾患」とは、伝染性皮膚疾患、毛髪疾患等、アトピー性皮膚炎以外の皮膚疾患と判定された者である。
 5 「その他の疾病・異常」とは、いずれの調査項目にも該当しない疾病・異常の者である。

2 主な疾病・異常の推移

疾病・異常のうち主なものの推移は、表7のとおりである。

表7 主な疾病・異常の推移

(単位：%)

	区 分	裸 眼 視 力 1 ・ 0 未 満 の 者	耳 疾 患	鼻 ・ 副 鼻 腔 疾 患	む し 歯 (う 歯)	心 電 図 異 常	蛋 白 検 出 の 者	ぜ ん 息
幼 稚 園	平成26年度	X	2.1	2.4	45.9	…	-	3.2
	令和2	X	2.0	4.8	38.9	…	0.5	2.4
	3	X	1.1	2.9	X	…	1.2	1.7
	4	X	2.1	2.0	36.0	…	0.7	0.9
	5	X	1.7	2.6	28.2	…	0.4	1.9
	6	14.2	5.5	4.0	28.2	…	0.6	0.6
小 学 校	平成26年度	31.9	6.2	13.7	59.8	4.9	0.9	3.3
	令和2	38.7	8.2	11.0	47.8	3.8	0.3	2.7
	3	39.0	6.6	9.7	49.9	3.6	0.2	3.3
	4	40.5	5.9	8.3	46.2	6.2	0.3	2.5
	5	39.4	6.2	10.2	42.9	3.4	0.3	2.7
	6	36.9	6.5	13.7	43.1	4.2	0.3	2.7
中 学 校	平成26年度	51.1	4.5	13.3	35.1	5.9	2.1	1.4
	令和2	54.9	4.7	9.1	27.4	4.2	1.6	1.6
	3	66.3	5.5	9.3	28.0	3.2	1.3	2.0
	4	X	5.3	8.3	28.8	2.8	1.3	2.0
	5	62.0	4.8	8.6	26.7	3.5	1.2	2.1
	6	65.0	4.5	8.2	23.9	3.7	1.6	1.5
高 等 学 校	平成26年度	53.4	2.2	13.8	55.3	5.3	2.0	1.2
	令和2	X	2.2	7.9	44.5	3.6	1.5	1.9
	3	X	1.9	8.5	43.1	3.1	1.1	1.4
	4	68.7	2.5	6.4	41.6	2.2	1.7	1.3
	5	X	2.3	6.1	42.2	4.1	1.0	1.7
	6	X	2.1	6.5	34.6	4.5	1.4	1.3

(1) むし歯(う歯)

むし歯(う歯)の者を、「処置完了者」と「未処置歯のある者」に区分すると、表8のとおりである。

むし歯(う歯)の被患率は、幼稚園28.2%(全国20.7%)小学校43.1%(全国32.9%)、中学校23.9%(全国26.5%)、高等学校34.6%(全国34.7%)となっており、幼稚園と小学校で全国平均を上回っている。

10年前(平成26年度)と比較すると、幼稚園では17.7ポイント、小学校では16.7ポイント、中学校では11.2ポイント、高等学校では20.7ポイント低くなっている。

表8 むし歯(う歯)の処置完了状況等の推移

(単位：%)

区 分		年 度						全 国 (R6)
		H26	R2	3	4	5	6	
幼 稚 園	計	45.9	38.9	X	36.0	28.2	28.2	20.7
	処置完了者	18.5	16.5	X	15.6	11.8	9.7	7.4
	未処置歯のある者	27.3	22.4	X	20.4	16.4	18.5	13.3
小 学 校	計	59.8	47.8	49.9	46.2	42.9	43.1	32.9
	処置完了者	27.5	22.7	23.6	20.1	19.4	19.8	16.4
	未処置歯のある者	32.3	25.1	26.3	26.1	23.5	23.2	16.5
中 学 校	計	35.1	27.4	28.0	28.8	26.7	23.9	26.5
	処置完了者	18.9	14.7	15.7	15.1	15.3	14.5	16.1
	未処置歯のある者	16.2	12.7	12.4	13.7	11.4	9.4	10.4
高 等 学 校	計	55.3	44.5	43.1	41.6	42.2	34.6	34.7
	処置完了者	30.3	23.4	22.8	23.0	25.3	21.0	21.5
	未処置歯のある者	25.0	21.1	20.3	18.6	16.9	13.6	13.2

(2) 裸眼視力1.0未満の者

裸眼視力1.0未満の者を、視力で区分すると表9のとおりである。

裸眼視力1.0未満の者の割合は、幼稚園14.2%（全国26.5%）、小学校36.9%（全国36.8%）中学校65.0%（全国60.6%）となっており、小学校と中学校で全国平均を上回っている。

10年前（平成26年度）と比較すると、幼稚園では12.3ポイント低くなっており、小学校では0.1ポイント、中学校では4.4ポイント高くなっている。

※高等学校は数値が秘匿のため、全国及び10年前との比較はできない。

表9 裸眼視力1.0未満の者の推移

（単位：％）

区 分		年 度						全 国 (R6)
		H26	R 2	3	4	5	6	
幼 稚 園	計	X	X	X	X	X	14.2	26.5
	1.0未満0.7以上	X	X	X	X	X	11.7	17.9
	0.7未満0.3以上	X	X	X	X	X	2.5	7.8
	0.3未満	X	X	X	X	X	-	0.8
小 学 校	計	31.9	38.7	39.0	40.5	39.4	36.9	36.8
	1.0未満0.7以上	11.0	14.0	13.1	13.7	13.0	12.7	12.6
	0.7未満0.3以上	11.9	13.7	13.7	14.3	13.6	13.1	13.9
	0.3未満	9.0	11.0	12.1	12.6	12.8	11.1	10.3
中 学 校	計	51.1	54.9	66.3	X	62.0	65.0	60.6
	1.0未満0.7以上	12.1	12.5	13.7	X	10.0	11.0	11.8
	0.7未満0.3以上	16.3	16.2	17.7	X	18.9	17.5	19.1
	0.3未満	22.7	26.2	34.9	X	33.1	36.5	29.8
高 等 学 校	計	53.4	X	X	68.7	X	X	71.1
	1.0未満0.7以上	X	X	X	4.5	X	X	12.6
	0.7未満0.3以上	X	X	X	21.6	X	X	19.1
	0.3未満	X	X	X	42.6	X	X	39.4

(3) 心電図異常

小学校、中学校及び高等学校の各第1学年において、心電図検査の異常を調査した。
各学校段階の心電図異常の割合は、表10のとおりである。

表10 心電図異常の推移

(単位：%)

区 分	佐 賀 県					全 国				
	R 2	3	4	5	6	R 2	3	4	5	6
小学校1年	3.8	3.6	6.2	3.4	4.2	2.5	2.5	2.6	2.4	2.6
中学校1年	4.2	3.2	2.8	3.5	3.7	3.3	3.1	3.2	3.2	3.0
高等学校1年	3.6	3.1	2.2	4.1	4.5	3.3	3.2	3.0	3.1	3.1